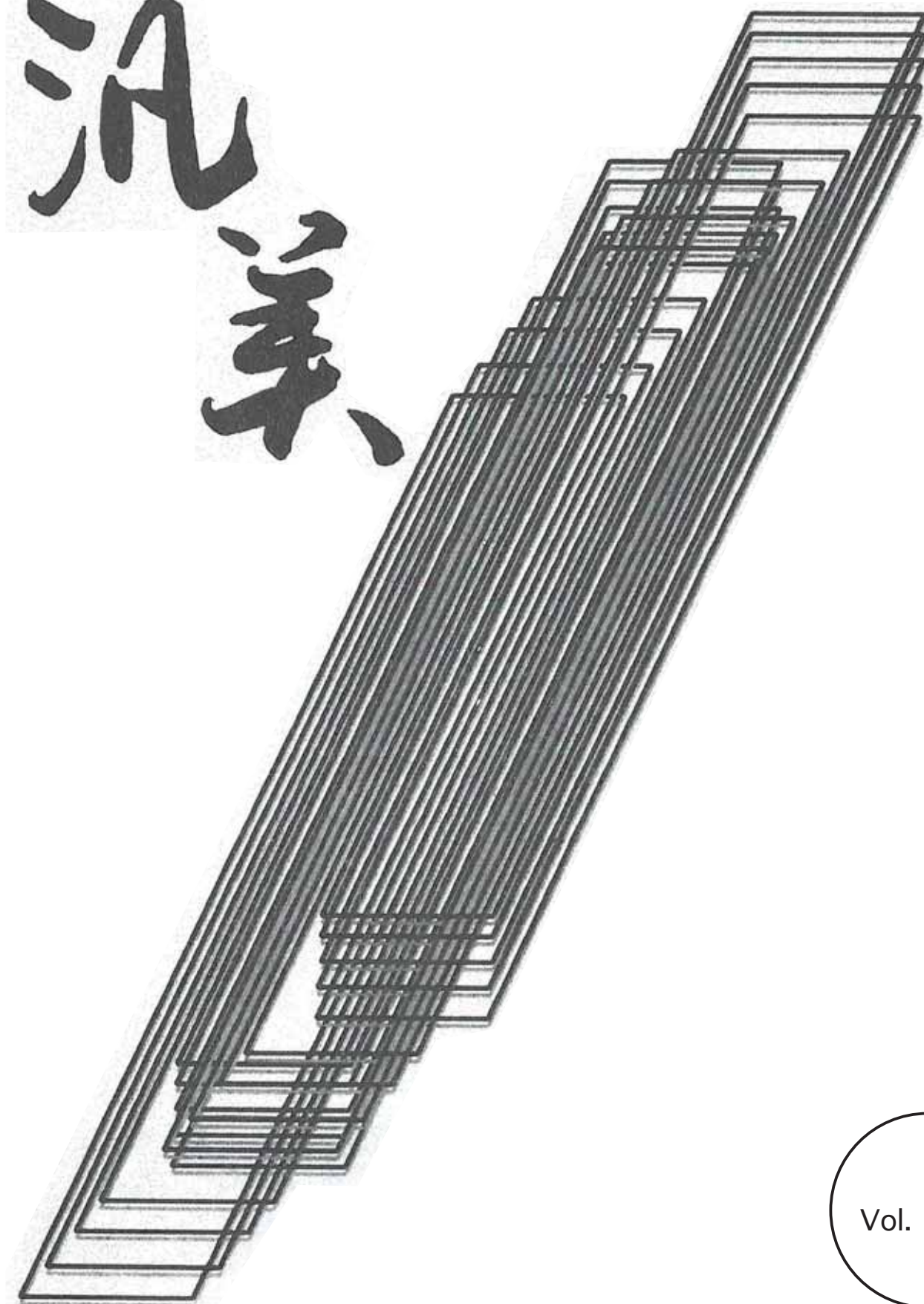


発行・汎美術協会事務局

2017年3月

汎
美



Vol. 38

汎美術協会会員便り

汎美便り38号

目 次

代表代理の挨拶に替えて	三竹 康子	3.
吉田敦彦代表を偲んで		
・「描きたいものを描きたいように… というメッセージを受けて	馬場 温子	3.
・吉田さんとすれちがった	丹羽千賀子	5.
・仙人・吉田敦彦氏を悼む	大辻 敏成	6.
2016 年度研修報告	島田 隆一	7.
・ポンピドーセンター傑作展	島田 隆一	8.
・ポンピドーセンター傑作展	中西 祥司	9.
・ポンピドーセンター傑作展	相京三千代	11.
・ポンピドーセンター傑作展	大谷敏恵	11.
自然に親しむ会報告	小杉 和美	12.
・日高市巾着田へ	小杉 和美	12.
廣のクロッキーブックより		
タブローによるトーキング	日和佐廣	14.
会員随想		
・一週間の田舎暮らし	岩田 洋子	16.
・和紙との出会いから	大淵チヨ子	17.
・美術のボクシング	佐川 毅彦	17.
・朝令暮改で分水嶺に	高木 須美	18.
・老境の今	保倉 一郎	20.
・掌説「木曾路の一夜」	愚 聴風 大辻 敏成	21.

表紙デザイン：三竹康子



8月、暑い日の午後の京橋。高架下の居酒屋で若者を待ちました。話したことがあるけれど、親しいわけじゃない、けれど話してみたいなという気持ちのままにです。年齢は離れているけれど、描くことが大好きな者同士です。
「暑いですね。作家って？を肴に、昼下がりのビールを飲み

……と、ここまで書き出した時、吉田敦彦代表の訃報連絡をもらいました。春の終わり頃、日曜会展会場の片隅で開かれた運営会で代表にお会いしました。また秋季展前「皆さんにお伝えすることを？」と電話で問う私に「自由に描くこと、十分に自由に描くことを伝えて欲しい」とおっしゃいました。

今、私は代表の残された熱い思いを代読する役目をしたと思います。来年の総会までです。どうぞよろしくお願いいたします。（代表代理 三竹康子）

吉田代表を
偲んで

「描きたいものを描きたいように…」
というメッセージを受け続けて

馬場 温

2016年11月23日、吉田さんは永眠されました。まだ信じられません。本人もそのつもりはなく逝ったのではないかと思います。まだまだこれから描きたい、動きたいと思っていたことが病床から伝わってきていました。山の話をするとう「いいなあー」と自分も行きたいといった気持ちがひしひしと感じられました。

私は「火曜会」「日曜会」「汎美術協会」と3つの会（団体）で大変お世話になり育てて頂きました。まず「火曜会」で吉田さんに出会えたことは、とても幸運だったと思っています。子育てが一段落して以前から絵を描いてみたいと思っていましたので、仕事をしながらでも可能な夜の公民館サークルを捜して、その講師が吉田さんでした。モチーフを提供する以外は細かな指示はほとんどなく静物写生が中心でしたが、カリキュラムはメンバーからの希望を入れて、石膏デッサンあり、遠近法や色についての勉強あり、そして抽象画の時間があるのも特徴でした。音楽を聴いて自分のイメージを画面に形や色で表現するという体験です。難しくもあり楽しくもありました。吉田さんは「市民のための美術入門」として3冊の本を著していますが（著書：Ⅰ「デッサンのすすめ」Ⅱ「抽象絵画のすすめ」Ⅲ「油絵のすすめ」）その本のエキスは火曜会で随分と頂いたように思います。

今まで、褒められたことも注意や修正を受けたこともありません。もっと何か言ってほしいと思ったこともありますが、絵というものは教えてもらうものではない、直してもらうものでもない、そうしたものだとして教えてもらったように思っています。『描きたいものを描きたいように思うままに自由にやればよい！！』それがいつでも心底からのメッセー

ジでした。出会ってからずっとそのメッセージを受け続けて来ました。火曜会に入会した時は、対象をなるべくそのままに描けるように細部まで具象にこだわっていた私です。か弱い絵でした。火曜会を続けていくうちに思い切って描くことの衝動に突き動かされ、ある野菜の絵を描いたときに「馬場さん描けるようになりましたね」と言われハッとしました。それが唯一褒められた（のかもしれない）記憶です。対象の形にも色にもこだわらず既成の枠を外して、受けた印象を思い切って自由に描いてみることに快感を得たようです。

その後、汎美展を紹介され約25年間。自分のやりたいようにやればいいんだという吉田さんのメッセージを支えに続けてきたように思います。「抽象絵画のすすめ」の中には火曜会のことも書かれており、カラーページの標準色紙による配色練習作例とBさんとして紹介されている数点は私の作品です。その調子でやっていけばいいんだよ、と言われたように今では感じています。

山や海、森や湖、光と風の中で自然と向き合いそこから得られる刺激をエネルギーにしていたのでしょうか。私たちにもそれを伝えるかのように、火曜会ではスケッチ会にもよく連れて行ってもらいました。可能な限り最低限の費用で誰もが参加しやすいように企画する、学生を引率していた経験からでしょうか、そうした配慮は徹底していました。それも平等・自由を大切にするとところから発している吉田さんの特徴だったと言えるのではないのでしょうか。

私は火曜会への入会から間もなく、さらにデッサンの必要性を感じ吉田さんが代表を担っている「日曜会」に参加するようになりました。「日曜会」は徹底してデッサンの勉強会です。毎週日曜日に裸婦モデルのデッサンをする、ほとんど休み無く開催され、講師や指導者がいるわけでもなく、まったく平等に諸々の役割は会員が分担して運営されています。吉田さんはその代表として日曜会の顔として存在していました。ご本人は連絡窓口だからと控えめでしたが、その活動を守るために発言したり、公的機関に申し入れをしたりと尽力されてきました。参加メンバーが自由に対等に研鑽しあう形を維持することに力を注ぎ、力関係の上下を嫌いどんなことでも話し合っ決めてるようにしていました。吉田さんの存在があったからこそ、このデッサン会もその体制を守られ長く継続されてきたのかもしれない。そしてこれからもそれが受け継がれていくことでしょう。

「火曜会」や「日曜会」に流れている空気、徹底して貫かれている精神といったものは、まさしく「汎美術協会」の基本的理念と同じものでした。汎美展への出展を薦められたとき「（私のことを）“先生”と呼ばないように」と言われました。公民館サークルの火曜会で講師でしたので、どうしても先生という呼称を使ってしまうし、ずいぶん長い間“先生”と言わないようにするのに苦労・努力しました。日常の些細なことのように考えられるかもしれませんが、でもそうしたことが対等で自由な関係の基本であることは理解できますし、私もそれは大切なことだと思います。表現者は対等であるべきという汎美の基本的な理念、それをゆるぎなく貫いていく中心的存在であったという象徴的なことではないのでしょうか。

上下関係や権威的なものを嫌い、自由に対等に表現活動できるように、それを阻害するもの制限する動きには常に戦ってきた人です。汎美展再興への活動や美術館展示権利獲得に熱心に働きかけてきたこと、それを語られる中で知ることができます。また新聞への投

稿などもその一つでしょうし、さらに2007年に投稿された「国の中央教育審議会・教育課程部会への意見書」では、芸術家としても教育者としても美術が生きる力にも通じるものであることを力説して、やはり吉田さんの真摯な基本的姿勢、具体的で深い見識に基づく意志とさえいえるものが伝わってきます。

とても激しい方だったと思います。まず絵を見てそう思います。そして文章からも。会話が弾むというタイプの方ではなかったですが、文章は長文でした。ホームページやブログを開設して、たくさんの作品や言葉を残しています。改めて拝見し、本当に生きた証がぎっしりと残されていると実感しました。ホームページ1と2に分けて『抽象表現作品』は合わせて150点近い作品群です。一つひとつクリックすると拡大してみることができます。やはり原画の迫力と魅力に叶わないのは言うまでもありませんし、比べようがありませんけれど。さらに『描写・写生の作品』として裸婦・静物・風景・デッサン・スケッチなどが抽象表現作品よりも多く約200点が掲載されており、合計350点程にもなるでしょうか。もちろんホームページ以前の作品も多くあるでしょうから本当に絵と向かい合って生きた人生だったのだなと驚嘆と共に敬服いたします。また、絵に向かう基本姿勢というか、作品の背景ともいえる日々の心情や社会情勢への思いや批判を綴って「汎美便り」に毎号投稿しておられ、それもホームページでみることができます。

山を歩き、描き、思いを貫いて生きた人生は饒舌さは一切なく穏やかだけれど、芯には激情を秘めて燃えた存在感があり、いつまでも汎美術協会の中にも残ることでしょう。

私はやはり吉田さんの抽象表現作品がとても好きです。2作品だけですがここに示すことで哀悼の意に代えたいと思います。



11-2・疑惑F50



在りし日の吉田敦彦代表



15-7 F150

吉田敦彦代表には、その生き方や働き・活動からたくさんのもを頂きました。有難うございました。心からの感謝と共に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

吉田代表を
偲んで

「吉田さんとすれちがった」

丹羽 千賀子

ものぐさの私が大決心をして、知り合いのいない汎美に出展の手続きをし、展覧会当番までしていることに自分でも驚いていた。

その日、確か最初の当番を終えて緊張から解放されて、虚脱感を抱えたまま乃木坂のホームに立っていると、静かに仙人のような佇まいの吉田さんを見かけた。

まだ名前も憶えておらず、展示会場での様子で会と関わりの深い方であろうと推測しただけであった。ホームの吉田さんはまるで重さというものがない様子にみえた。

地下鉄の風圧で舞い上がってしまわれたら急いで捕まえなくてはと思ってしまったほどだ

った。強い印象が残った。

会期の終わり近くになると、事務局の大野さん、最初にご自身の作品と汎美について話して下さった三竹さんのほかにも何人かの方々のお顔と作品が結びつくようになってきた。ことに吉田さんの作品はご本人の印象との乖離があまりにも激しく驚かされた。

私が日常的に会い話している絵の友達はみなしっかりした具象を描いている人ばかりで、抽象寄りの絵を描いている人はいない。いきずまっても 話す人がいないのだ。

「どうしてこの絵を描いたの?」「そのフォルムの原形は?」「エスキースはどうするの?」「どこかでいきずまった?」等々。

そんなことは自分で考えろと言われるのは承知の上で、「あなたの場合は?」「その絵の場合は?」と、日々迷っている私はきいてみたいのである。

一好きに、自由に一は無論だが、狭い自分の中だけではどうにもならなくなる。

どこかに作品の種が落ちていないものだろうか。あったら拾ってみたいという欲張った心持になるのだ。私の勘では吉田さんの周りに落ちている。

あの穏やかな佇まいとエネルギッシュな絵のギャップの間に。でも強くて長い線が何本も引かれた絵の前で、「僕は1時間以上仕事をすると、体調が悪くなってね。」とおっしゃった私は何だか煙にまかれたような気がしたが、あの頃から病気が少しづつ追いついて来たのだろうか。

ネットに近づきたくない私は、その頃は過去に制作されたすごい量の作品群を知らなかった。ただ「抽象画のすすめ」という御本を読み始めていただけだった。おだやかな分かりやすい文章は、作者の柔らかな声と語り口を彷彿とさせたが、奥に強い信念も感じた。

迷いを口にする私に「使いたい色や形を置きたい場所に置いていったらいいんです。僕はエスキースをしません。その時の気分です。」そして、自然からよく学ぶこと、スケッチやデッサンも大切だと強調された。一方で何のことだったか「クソリアリズム!!!」と吐き捨てるような激しい声も聞いた。

日頃の穏やかさと違った鋭さで、これも印象にのこっている。吉田さんの絵画観をちらりと見た気がした。私が個人的に作品へのアドバイスをもらったのは三度の展覧会で合わせても30分位のものだったし、話を脳で聞いたのも10回に満たない。吉田さんの肖像画を描こうにも、手持ちのピースはあまりにも少ない。しかも私の独断と偏見でグニャグニャと変形までしている。もっと沢山話を聞きたかった。最後に出品された展覧会の時に「僕は近頃頭の状態が悪くて、急にドキドキしてきて不安な感じがしてくるんだよ。」とおっしゃった。苦いものを飲み込んだような暗い顔だった。なにも言えなかった。

亡くなって初めてネット上にある作品群を見た。積み重なった時間と注ぎ込まれたエネルギーに圧倒されるばかりだ。

まだまだ描きたいと思っていらっしゃったのではないかと、あの苦い顔を思い出している。残念でならない。

吉田代表を
偲んで

仙人・吉田代表を悼む

大辻 敏成



「いのち・おびえ」 吉田敦彦

汎美術協会は、従来の美術団体にある権威主義や臭い階級制を嫌い、作家の自由な創造活動を標榜する会として、1933年(昭和8年)に新興独立美術協会が創立された。これが汎美術協会の母胎である、その後1946年・二次大戦後、それを受け継いで汎美術協会と改名して発足した。氏は

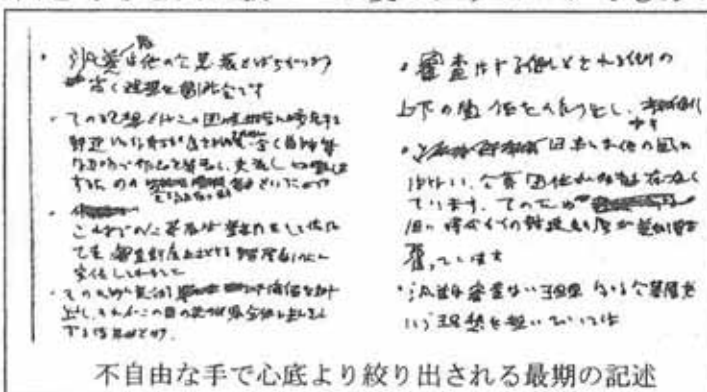
その主旨を尊重しながら、故ミスター汎美=境 弘正氏とともにこの美術団体を発展させることに貢献されたのである。

従って氏は常に会員の作家としての「汎美憲法」の番人でもあった。病床にあってもその意識は衰えることは無かった。動けない手を酷使し、死力を尽くして述べられているのもこのことだったのである。表現者の自由を守ると共に我々への愛のメッセージでもあったのでろう。

ここにその一部をご紹介します。

吉田敦彦氏最期の記述

- ・汎美展は他の公募展とは違えます
高く理想を掲げた会です。
- ・この理想とはこの国の美術界に残存する封建的な身分制度を批判するために、全く対等な立場で作品を発表し、交流し、切磋琢磨するための“場”を作り出す…ということです。



不自由な手で心底より絞り出される最期の記述

- ・これまでの公募展は、登竜門として存在しても審査制度を主とする階級制の上に安住していました。
- ・その為美術に上下関係を生み出し、それがこの国の美術界全体に蔓延する結果となり…
- ・審査は「する側」と「される側」との上下関係を作り出します。日本には他の国には無い公募団体が多数存在しています。そのため古い時代からの封建制度が美術界を覆っています。
- ・汎美は審査の無い“理想的な公募展”という理想を担ってい…（以上カットの内容）

またこの他の手記には以下などがある。

- ・絵を描ける幸せ、絵を見せ合える仲間のいる幸せ。
- ・何と言ってもキャンパスの上は全く自由になれる空間。



み根の はな丑紅に君逝く日

恋 聴風

ご冥福をお祈り申し上げます

汎美会員・出品者・汎美関係者を代表して

合掌

2016年度研修報告

研修係 島田 隆一

- ※内 容 「ポンピドゥーセンター傑作展」鑑賞
- ※場 所 東京都美術館
- ※日 時 2016年8月18日
- ※参加者 久保 吉澤 保倉 大谷 高木 中村 中西 小林 昭井 大淵 小杉 阿部 相京 島田

当日は天候が荒れ模様で、時折激しい雨も降り、鑑賞後の懇親会は都美館 2F の食堂で行いました。展覧会の感想や汎美の歴史等が話題になり、短時間でしたが楽しい時間を過ごしました。

ポンピドゥーセンター傑作展

島田 隆一

普通、展覧会と言えはテーマやイズム等によって構成されているのが一般的なのだが本展はそうではなかった。

1906年のデュフィのフランス国旗を描いた作品から、1977年のポンピドゥーセンターが開館され、その模型の出品までの72年間のフランス近現代美術の断片を切り取って一年一作品一作家の形式で展示している。

関連したイズムの解説等は一切ない。代わりに作家自身の短い言葉と作品がセットになって展示されている。

一見すると、比較的数が多いフォーヴィズムやアンフォルメル作家が目につく。

今見ると、何かある種レトロな感じがするが、その後の社会の急激な変化がそう感じさせるのだろう。

私が学生だった頃(1970年前後)は抽象と言ってもアンフォルメル系の作家に接する機会が今よりずっと多かった。近年は同時代のアメリカ中心の抽象表現主義の作家を目にする機会が圧倒的に多い。

マチューのカリグラフィ様の抽象も理屈的には身体行為の痕跡というポロック等のアクションペインティングとあまり変わらないと思うのだが何かが違う。

一番の要因は画面の大きさだと思う。

今見ると、アンフォルメル作家は画面の大きさはもちろん内容的なものも含めてなにか心地よいヒューマンスケールの範囲に収まっているように見える。

従来からの絵画の縛りが強いのか、あるいはアメリカとフランスの文化的風土の違いによるのかはよくわからないが、抽象表現主義の作家のほうが従来の絵画領域から脱しようとするインパクトや表現の工夫が感じられる。

又、同時代という意味ではアメリカのネオダダに対するヌーボーレアリスムのイヴ・クライン等は是非取り上げて欲しかった。

30年前にポンピドゥーセンターを訪れたことがあるが、歴史的な作品が目白押しだった。今回は、あまりそれらの作品を目にすることが出来なかった。

よく知られた代表的な作品がない訳ではない。マチスの「大きな赤い室内」はそうだと思うが、鑑賞後の懇親会では「作品選択の基準がわからない。」と言う話がでたが同感だった。

ただ、個人的には新しい発見もあった。ブラックはキュービストとばかり思っていたが、今回出品されていたのは、初めて見るバリバリのフォーヴィズム風の作品だった。対象の様々な見方そのものを試していたのだろうか。

ヴィアラは、絵画の物質的な側面を問題にした作家だが、出品されていた作品は太いロープを天井から吊り下げ、結び目だけを着色した作品だった。物質性の強い立体作品も制作していたのだ。今回の作品を見て、ヴィアラの平面作品の展開も納得がいった。

マチスの「赤い大きな室内」は、画面上部に長方形の2枚の絵が対になるような形で描かれている。右側の絵がカラーで左側の絵がモノクロだが、真中にたてに黒い線が引かれている。新聞の解説で知ったのだが、黒い線は面と面の境目の稜線なのだ。絵の掛けられている左右の壁は同一平面ではなく、稜線のところで屏風のように折れ曲がっているのだ。

画面の奥に向かう面を画面に平行に回転させるのは、キュビズムの手法だと思うがフォーヴの作家と目されているマチスがいとも簡単にそれを行っているのが興味深かった。我々から見るとそのことにどんな意味があるのかとってしまうが、ギリシャの時代から3次元のイリュージョンを平面に表現するために苦闘してきたのがヨーロッパのアートの歴史なら、印象派以降ベクトルが変わると、それを又、徹底するのもヨーロッパなのかなと思った。

そう考えると浮世絵が評価されたのも平面化を求める時代的要請が存在していたことが関係しているのではないだろうか。

それと今回初めて知ったが、この絵が描かれたのが戦後の1948年ということで、マチス最晩年の作品群の一つだということだ。意外と新しい作品なのだ。

カンディンスキー、モンドリアン、マレービッチ等の初期の抽象の描かれたのが1910年代で1948年というと抽象表現主義やアンフォルメルの出始めた時期だと思う。

マチスはそれらを見ているにちがいない。そんなことを考えながら見ていると描かれている室内の静物も略画的だったり、意識的な塗り残しがあったりして、具体的には何が描かれているかわかるものの、現実のイリュージョンを喚起することにはあまり意味をおいていない様にみえる。

それらはマチスの絵を構成する一造形要素なのだろう。

黒い稜線というよりは黒い線なのだと思う。赤い色彩そのものの価値と画面構成とそれに伴う絵画的イリュージョンが魅力的な「赤い大きな室内」は、マチスの「赤い大きな絵画世界」というのがピッタリだと思った。今回改めて見て、一見、見た目より抽象に近いところに位置している様にも思えた。マチスの言葉「私は色彩を通じて感じます。だから私の絵はこれからも色彩によって組織されるでしょう。」も明快にマチスの本質を語っていて印象的だった。

その他に、展示作品が絵画だけでなく、彫刻、写真、建築、映画、デザイン、と多岐にわたっており、この間の時代のリアルな雰囲気の一部は感じる事が出来た。

整理されたイズムも後付けであり、渦中であってはもっと多角的で錯綜したものなのだろう。

イズムによる見方をシャツフルしてもう一度現実に即して見る機会にはなった。

展示会場の構成は、室内がフランス三色旗にちなんで、赤、青、白、の三色に塗り分けられ斜め、ジグザグ、円形、のユニークな展示壁面だった。

見ることに専念してボーッと歩いているだけでも自然に年代順に見られる様人にやさしい作りになっている。パリで活躍している日本人建築家の仕事だそう。

展覧会と会場構成にみられる形式重視とフランス中心主義が印象に残った展覧会だった。

ポンピドゥーセンター傑作展 (2016.6/12>>9/22・東京都美術館)

中西 祥司

フランス美術の20世紀の70年間に焦点をあて、1906年(明治39年)から1977年(昭和52年)までのタイムラインにそって、1年ごとに1作家の1作品を紹介するという企画。それに作

家の肖像写真と作家の作品制作にまつわる一言を加えて展示していた。その展示によって、作品を観るだけでなく「作家を知り」「考えに触れる」。一作品に対する視点が多角的になっていく、面白い企画だと思った。

特に、1年1作家で70人70点、当然のこと著名な作家が大勢いるが、中には初めて出会った作家もいる。まるっきり知らない作家でも、「写真」と「ひと言」で作家像が思い浮かび、親しみが感じられ、作品に対する興味も高まった。作家を知ってもらい、作家の基本姿勢を知ってもらうなど、作品に奥行きを持たせる展示になっていた。年度ごとに一人を選び、それぞれの作家の象徴的な写真を選び、一言を選定する作業はさぞかし大変な作業だったと思われる。

表面的な展覧会に一石投じる企画であり、汎美展に取り入れる価値もあるのではと思いました。

「ひと言」の中に、気付かされたり、共感を覚えたり、流石と感じたり、いろいろありました。いくつかご紹介します。

1907 ジョルジュ・ブラック (Georges Braque)

当初の幻想が消え去った時に、絵画ははじめて完成する。

The painting finished when it has crashed the idea.

1917 フランティシェク・クプカ (Frantisek Kupka)

かつて、私はアイデアにかたちを与えようとしていた。今はむしろ、かたちに合うアイデアを探している。

1919 ジャン・プーニー (Jean Pougny)

絵画の中に見出され、明らかにされた要素同士は新しい現実であり、新たな絵画の出発点である。

1933 オットー・フロイントリットリッヒ (Otto Freundlich)

絵画は二つの力が会える場である————。一つは天のかなたからの力、もう一つは私自身、つまり、大地に根ざした人々の生活する社会から来る力である。

A painting is a meeting point between two forces. One of these force come from afar, the other from ourselves and from over community with the earth.

1935 パブロ・ピカソ (Pablo Picasso)

私は他の人が自伝を書くように、絵を描いている。

I paint as other write their autobiography.

1948 アンリ・マティス (Henri Matisse)

私は色彩を通じて感じます。だから私の絵はこれからも色彩によって組織されます。

I feel through color, therefore my canvas will be always organized by it.

1953 フェルナン・レジェ (Fernand Leger)

色彩は必要不可欠です。水や火のように、生きるために欠かせないものです。

Color is vital need. It is a raw material as essential to life as water and fire.

1969 アガム (Agam)

リアリティとは目に見えないもの。我々の見ているものは全て幻想だ。

Reality is invisible. Everything we see is illusion.

2016 中西 祥司 (Shoji Nakanishi)

内面的な表現を追求するとしても、外部環境を遮断することは難しい。外部環境を意識した時に、既に、外部環境の影響下に取り込まれている。

作品制作にあたりと言うか、人生時々の思考、行為を言語化し、記憶しておくことが大切だということを改めて感じました。

「ポンピドゥー・センター傑作展」を見て

相京 三千代

パリのポンピドゥーセンターが所蔵する作品の中の 1906 年から 1977 年までの作品を一年毎に一作家、一作品を紹介する展覧会を、上野の東京都美術館にて 2016 年度汎美の研修会として鑑賞いたしました。71 点の作品を見て感じたことは、やはりピカソ、マティス、シャガールのものが作品として良かったと思いました。この巨匠と云われる作家の作品は、彼らの絵を描く姿勢、絵というものは技術だけでなく、物を見る力だけでも無く、作家の持つ精神、哲学、思いを表現する力が絵を本物にするのだということを改めて感じさせてくれたことです。

パブロ・ピカソの「ミューズ」は初めて見た絵でしたが、その表現は強く、他の絵を凌駕している感がありました。マティスは赤い室内の絵を数点描いているが、今回の絵「大きな赤い室内」は、マティス晩年の制作と云うことで、決して他と比べて重々しくはないが、絵の手前に描かれたネコとイヌがコミカルで楽しい絵でした。シャガールの絵は多くの人がある有名な絵で、自分の結婚の喜びに花嫁に、ワイン片手に肩車されて有頂天になっている自分を表している、ユダヤ人の思考の深さと感性を表していると感じました。

他に、今回は建築家の作品が 2 点出展されていた。一点はル・コルビジェの油彩画です。コルビジェが絵を描いているとは知らなかったが、静物の絵では幾何学的なピュリズムな感性で、美しい色と構図を形成しており、静物なのに建築物を描いたのかと思わせる良い絵であると思いました。



シャガール

もう一点の建築家の作品は、絵ではなくレンゾ・ピアノの「ポンピドゥー・センターの模型」である。レンゾ・ピアノは私の好きな画家パウル・クレエのスイス＝ベルンにあるパウル・クレエ美術館を建築した人で、その建物の波打つような曲線は遠くから見ても美しい。今回のポンピドゥー・センターの建物もやはり階段が流れるようで美しかった。

そして他にも感銘を受けた画家達の絵を見たが、一作家一作品だと、時代の流れ、バックボーンが見られて良い展覧会であったと思いました。

「ポンピドゥー・センター傑作展」を見て

大谷 敏恵

フランス 1906 年から 1977 年までの作品は多彩な展開だった。71 年間で 1 年 1 作家 1

作品でたどる展示は、有名な巨匠の作品からあまり知られていない作家の作品まで、各年なぜその作家の作品なのかという点に目を奪われた。知り覚えのある作品も、制作された年代など詳しくは知らなかった。20世紀ヨーロッパの歴史は戦争や体制、政治経済、主義、生活など急激な社会変化であり、民衆や作家の内面にある感性、価値観、希求、欲求、喜び悲しみなどが作品の中にある。私は20世紀のヨーロッパの歴史をあまり知らなかったもので、作品を見てその時代を思い出したり社会や作家の思いをあらためて学び知ったように思う。作家の言葉はどれも興味深かった。20世紀という時代を作家達はどうかとらえ、生きて感じて表現したのか。私は第二次世界大戦、戦後、60～70年代に興味を持った。私が生まれた年は、知らない写真作家による“リュクサンブール公園、初雪”という白黒写真。地味だが子供が雪合戦をする暖か味のある風景だ。漸くパリに訪れた平和で自由なひとときなのか。翌年は人間を深く見つめたジャコメッティだった。私は作品もよく見たが、その年がどんな時代でどんな作家がどんな表現をしたのか、自分の歴史と重ねたり、時代性に関心をもった。

また、もう一つ面白かったのは展示空間の斬新さだ。少し前、新聞でこの展覧会の展示構成はパリで活躍するコルビュジェに憧れた日本人が担当するという記事を見て、どんなものか見たかった。入口を入ると直ぐ斜めに進む展示壁面は、20世紀の時代がまっしぐらに進むのを感じさせる。ジグザグに進む壁面は、一年一年、次は何かとわくわくさせ巨匠の作品に巡り合わせてくれる。広い円形の壁面は、開放された自由な時代になったことを感じさせる。新しい芸術の様々な創造はモダンアートの始まりであり、芸術とは何かを更に考えさせられる。とにかく作品と展示構成に20世紀という時代のスピードと感性を感じさせられた展覧会だった。

そして80年代以降、芸術はどう進むのか次が見たいとおもった。

2016年度「自然に親しむ会」報告 ～日高市・巾着田(きんちゃくだ)へ行こう～ 開催しました！

「自然に親しむ会」係 小杉 和美

高麗川の蛇行により、長い年月をかけて作られた形が巾着に似ていることから巾着田と呼ばれる。その高麗川周辺は、石器時代の住居跡や近代の高麗家住宅など、人々の営みが脈々と息づいている。歴史が偲べる里で散策とスケッチを開催した。

10月23日(日)、西武池袋線高麗駅前。10時を目処に参加者10人が集まってくる。見上げる程の高さから大きな目をむいて立つチャムスンが私たちを出迎えてくれた。「チャムスン」とは朝鮮半島の村々の入口に立つ魔よけの事だ。この駅に降り立ち、ここから発つ人々を見守る。高麗とはそうした町なのだ。



秋風よぎる巾着田

高麗石器時代住居跡へ

天気は上々。駅から徒歩5

分、国道を秩父方向に進み左

手の小道を入った辺りに遺跡は在った。昭和の初め(1929年、昭和4年)に発掘された

遺跡には直径6mの円形窪地に柱を立てた穴が残る。現代から照射して生じる括りが古代であり、当時は常に最先端の現在だ。竪穴式住居の様子は縄文人が生きる為の手立てのひとつだったと思う。4500年前の縄文中期は温暖期だったからこの住居の生活環境は悪くはなかっただろう。技術にも進化が認められる事は出土品が証明している。集落ごとの交流も行われ、暮らし向きは安定していたことだろう。そんな温暖期を暮らすその死生観に想いをめぐらしながら、国道に出る坂道を下る。



高麗駅前のチャムスン



水天の碑
水難雨乞神



巾着田へ誘われる仲間

巾着田へ

歴史は面白い。けれどもスケッチも楽しい。巾着田に向かう参加者の足取りが心なしか速まっている。いや、腹時計もそろそろ気にかかり始めていたかも知れない。降りた駅を通り過ぎ、小道を行くと1839年(天保10年)に村人たちが建立した「水天の碑」に出合う。先人たちはこの高麗川が幾度となく氾濫を繰り返した事実を後世に伝えてくれている。少し進むと大きな堰が見える。蛇行する川の内側の肥沃な土地。秋に咲くヒガンバナを曼珠沙華と呼んでいる。天上に咲くという架空の花の名で呼ばれて9月の彼岸の時期に真っ赤に花開く500万本。その数は全国で一番！その地が巾着田なのだ。

花の季節はとうに過ぎてはいるが、川辺りや林の中一面に広がる見事な赤を想像する。それはそれでいい。だが、「すべての季節がとにかく素晴らしいのだから！！・・・」とNさんが言葉に力を込めて伝えてくれた通り。巾着のカタチの内側を歩くと分る。かつては一面が田んぼだったところに延びる小道をゆっくり歩く。沿って流れる澄んだ小川に小さな魚の群れを見る。「これってフナだよ!」、「シジミもいるよ!」。声が飛び交う。遠くに見えていた水車が近くなる。見上げると空はこよなく晴れて青く、白い雲がま〜るく広がって極上の気持ち良さだ。林を抜けると高麗川の明るく暖かそうな河原に出た。川岸の散策路に置かれたベンチで一休みしつつ、お腹も満たしつつ、スケッチ場所の見当を付けつつ、各自小さなスケッチ帖やら最小限の道具類、カメラなどを手に四散した。

湾曲する流れの対岸は鬱蒼として見えて、秋の緑の枝葉が川面に覆いかぶさる。9月の始めごろには川の中ほど辺り、頭を出す岩にカワセミも見たが今日は影もない。巾着のカタチも終わりかけの高麗川にびたりとはまって絵になる木製の橋が「あいあい橋」だ。名前の由来も気になるが近づくと長さ91.2mの骨組みの木の見事な美しさがとても気にかかる。それはトラス構造(スギ材の骨組みの節点がすべて鋼製のボールジョイント)だからかも知れない。歩行者専用橋だから訪れた人はこの橋を渡って巾着田に別れを告げることになる。

高麗神社へ

午後の日差しの中で秋の川風が冷気を運び始める。国道沿いの古民家・高麗家住宅(旧新井家住宅)を訪れる。母屋は江戸時代末期の建築で木造の入母屋造り、客殿は書院造の

造作で明治の建築。新井家は名主、戸長、村長も務めている。現在は有形文化財として日高市が管理運営して演奏会、美術展示、撮影会などの催しで地域活性化に貢献している。白壁沿いのコスモスが優しい色映えを見せていたのも印象に深い。

高麗神社までの山間の2、5キロの道のりを歩く。歩く。歩く。歩く。歩く。別称カワセミ街道と呼ばれるほどの小道の心地よさが薄らいだのは風のせいでも日差しのせいでもない。この時期、この地域の例大祭、獅子舞奉納、高麗建郡1300年に重ねた地域興しに集まる人々の熱気と波に呑みこまれてしまったのだった。静かな季節にもう一度訪れるのも悪くはない気がする。

秋の陽だまりの河原に車座になって人生を語りあう。思い思いにそれぞれ慣れた仕事の仕方でスケッチを楽しむ。写真を撮る。歩く。この日高・高麗周辺地域の在り方や歴史に、ほんの僅かでも触れる事ができたかどうか。描きたい対象に出会えたかどうか。乗り換え駅でもある飯能で反省会の円卓を囲み、飲み、食べ、喋り、賑やかな笑いと共に解散となりました。楽しさも、疲れもそれぞれに抱えて帰路につかれた事と思います。

参加の皆様の大きな心に支えられ、秋晴れに恵まれて自然の中で集う事が出来ました。幹事一同、御礼を申し上げます。皆様、ありがとうございました。



高麗川で人生について語り合う

「自然に親しむ会」係 小杉和美

2016年12月

日和佐 廣のクロッキーブックより 「タブローによるトーキング」

讚 編集係

氏は普通の生活の特異な感性でモチーフ化する異色の版画家である。その世界はペーソスに満ちたもので、人間存在の哀愁、孤独や不条理を笑いの中に閉じ込めたものと考えられるのである。それは恰もピエロの哀しみと言えそうである。

シャガールの遺した言葉に「他人は私の絵を幻想だというが、私にとっては現実なのです。人々は家を失い空を舞うのです」とあるが、これを氏に当て嵌めてみれば次のように



好きなモチーフにされてしまうだろう。



「他人は私の絵にはペーソスがあるというが、私にとっては日常の現実なのです…」

と、見事なテレ笑いを持って述べることだろう。性まことに穏やかな氏には女性のファンが多いのだが、それを羨み己の嫉妬心を高ぶらせれば、己自身が格

日和佐 廣の「タブローによるトーク」



1 週間の田舎暮らし

岩田 洋子

7年前から毎月、遠方に住む90代の両親の家に行き、1週間ほど過ごしている。介護というほどハードではないが、コンパクトで便利な日常より、運動量はだいぶ多い。

12月は、それでなくても慌ただしいだということに、足を踏み抜きそうなりビングの床を張り替える工事、が想定外に入ってきた。父は、こういうことには億劫がって、不便や不自由さにも無頓着だが、母は昔から、思い立ったら「すぐやる課」で、4か月前から頼んであったそうだ。確かに高齢者の事故は、家庭内で起きるのがもっとも多いそうだから、ちょうど私が居る時でよかったのだが・・・

夜来の雨が上がった早朝、大工の棟梁が顔を出し、「今日とりかかるから、大きい家具はこっちで運ぶから、片づけといて。」と言って出て行った。(前日の連絡や、こちらの都合なんて関係なしなんだ～) 朝食そっちのけで、ストーブに炬燵、昼寝布団、こまごましたものは、洗濯かごやらバケツに突っ込んで、慌てて隣の部屋へ退去した。

ところが、2時間待っても誰も来ない。止んでいた雨が降ってきたからなのか、でも室内だから大丈夫だよー、などと3人でブツブツ話していたら、やっと来た棟梁いわく、「大工の一人が山～行っちゃって、つかまらないよ～」(ん?山?) 聞けばその大工さん、猪や鹿の狩猟が趣味で、雨上がりの日は足跡が判りやすく、追いやすいのだそうだ。しかも、「スマホはサイレントにしてあるから、何度呼んでも出やしない!」とぼやいていた。母が細々作っている畑で、猪らしい足跡を見たことがあり、また、鹿の親子が海岸へ下りて行くのに出くわした事もあり、最近は鉄砲を撃つ人が減って、里での被害は日常茶飯事らしく、有り難いのもかもしれないけど、でもねえ、仕事が入っているのに、朝飯前にズド～ン!と狩りをしに行く～??

慌てて片づけたので、私は腰痛悪化し、両親も荷物に囲まれた部屋で炬燵にあたっていた。東京にいたら、腹が立つところなのだろうが、理由を聞いておかしさが先立ち、3人で笑ってしまった。さらに棟梁は、「弁当を持って行かなかったから、昼には戻るだろう。」と。なんでも、その大工さん、ホテルのリニューアル工事を数か月やっていた間、鉄砲撃ちに行きたくてうすうすしていたのだそうだ。工事終了と共に、彼にとっては狩猟解禁だったのだろう。私は、大工さんが、道具箱ならぬ鉄砲を担いでいる様が頭に浮かんで来て、山の方から何か聞こえてきそうな気がした。

昼過ぎ、当の大工さんが来たので、「山へ行ってたんですって?」と聞くと、「おっ～!」ととぼけていたが、ストレス解消したことだろう。あまり話を突っ込んで、猪肉なぞ持って来られても迷惑なので、それ以上は聴かなかった。

片道3時間半のロングドライブと、ヘルパー生活はだんだんしんどくなってきたけれど、こんなおんびりした時の流れと、大きな空をいつでも見られるのは、私の息抜きにもなっているのかもしれない。帰京すると、頭の中がス～ス～と、風通し良いような気がするのだ。

和紙との出会いから

大淵 チヨ子

しばらく油絵を描いていた私はある時、染色に出会った。自然の染料である藍や紅花などで布を染める草木染めです。自然のもつ色の美しさに感動し、絹や木綿を染めて楽しんだ。

そんななか、手軽に手に入る和紙を染め始めました。

和紙はしなやかで強く吸収性にも優れ、折つたり千切つたり、もんだり包んだりと実に造形性にも優れている。

人にもやさしいにじみ、ぼかし、型づくりなど様々な方法での作品づくりはとても楽しく、紙と私の相性があったのである。

想像をはるかに越えた染め上がりの時は感動した。

和紙が私の心を吸収してくれたような気がした。

紙はかなり古い歴史があり紙の芸術作品も多い。「印象派」の画家に大きな影響を与えた「浮世絵」、近代になりマチスの「切り絵」、イサムノグチの「AKARI」など平面から三次元へ、またデザインの世界まで展開された。

現在では紙の造形作家も沢山いる。

和紙から始まりパピルス(エジプト紙)、韓国で出会った韓紙や南国の植物の繊維との出会いは私を魅了した。版画、コラージュ、レリーフ等、紙の種類に応じて表現方法を変えてみた。

制作にあたってはあくまでも素材そのものの良さを最大限に生かせるように、少し手を加えるということを念頭に置いてる。

今は紙のみにとどまらず、古くは紙の原料だった麻やシルクロードの代名詞でもある絹の美しさに捕らわれている。

これからどんな物とめぐり合い、私の想像力をかき立たせてくれるのか楽しみです。

美術のボクシング

佐川 毅彦



私が小学1年の時、担任の先生がお話をしていて、話の中にオオカミが出てきた。「だれか狼の絵を描ける人いる？」と先生は仰った

安里 宏という男の子が手を上げて黒板にチョークでサ・サッと一気に迫力のあるタッチで狼を描いた。凄いやつがいるもんだ、私と宏の最初の出会いである。

人物は人物を知る、中学3年までに彼と3回同じクラスになった。その間、私は何度も宏

の才能に魅せられた。未来の風景を描いても割り箸で建物を作つても、トーテムポールや、あるいは彫刻刀で版画を彫らせても、なにを作つても素晴らしかった。

そして書道もうまかった。それからいたずらに、クラスメートの似顔絵をよく描いていた。人物の特徴をうまくとらえていて、その人の欠点をオーバーに表現して楽しんでた本人には見せないようにボクらに見せては大いに笑い転がしてくれた。先生たちも犠牲になった。

今思えばかなり馬鹿してやりすぎである。私は殆ど独学で絵を描いてきたけど、彼と出会えた事が1番勉強になった。今でも尊敬している。

中学3年の文化祭で絵の展覧会があった。美術の先生が積極的に参加を呼びかけていた。絵心のある生徒には直接参加を要望していた。私も画用紙と絵の具を渡されて傑作を描いてもってこいと言われた（この頃、私も少しを認められていたと思う）

私は赤い瓦の家を荒々しく表現してもっていの先生に見せると「なかなかやるじゃないか…ってもらえたようであった。当日展覧会場に観宏の絵は2番目で私の絵が最優秀賞であった。…”ととてもうれしかった。

それから私は画家として間違つた道を歩きつづる。苦節何年経つても認められない人生を送



は絵の才能

った。美術」と気にいにゆくと、“やった!

けるのであています。

宏とは高校が違いその後のことは解らんが時風の便りではのちに彼は甲子園で有名になった高校のボクシング部に入りプロボクサーになったと聞いた。

が過ぎて、

それからさらに年月が過ぎて私が47歳の日曜日の昼、何気なくつけたテレビでボクシングの世界戦を中継していて、外国人のチャンピオンに日本人が挑戦していた。挑戦者側のコーナーにはタオルを首にかけたヒゲ面のオッサンが付いていた。“アレッ! そのヒゲ…どこか見覚えあるような?…”すると「安里会長がどうか…」と言うアナウンサーの声が聞こえてきた。

“えっ! おい、なんとこのヒゲ、あの宏ではないか…”

沖縄で彼はボクシングジムを開いて会長になっていたのである。



朝令暮改で「分水嶺」に

高木 須美

現在43才の次女が幼稚園に上がった年に、私は近所の絵画サークルに入会。今も在席しています。当時、指導の先生が公募展出品を熱心に応援してくれる人で私も仲間と共に入落に一喜一憂しながら、ひたすら公募展向けに百号級の大作を描いていました。ラクビーや向日葵がモチーフの具象画でしたが、ある時期、連続落選してその折、知り合いの会員から入選し易いという理由で抽象にするよう勧められました。

抽象画など描いたこともないし抽象の意味も理解できていない。それからは一からの指導が必要でした。

しかし、私はそれまで一言指導されると朝令暮改で絵が変わってしまう変節漢で、指導の先生を煩わせていました。180度違う抽象にしますなど先生の困惑が想像されて言い出しかね、相変わらず向日葵など描き続けていましたが、抽象画を描いてみたいという気持ちは永く捨てきれずにおりました。

そんな折、黒沢さんを通して汎美展を知りました。ここで思い切って描いてみようと思入会しました。しかしいざ抽象を・・・となると雲を掴むよう、後戻り出来ない思いでモチーフを平面に分解して貼り合わせてみたり試行錯誤のくり返しが何年か続きました。

その頃ですが我が家の本棚で背表紙に「大興安嶺探検・1942年探検隊報告、今西錦司編」とある文庫本が目にとまりました。太平洋戦争の只中なのに仕合わせな人達、そんな事に興味を覚えページを開いてみました。その内容は学術報告であると共に自然の描写が生き生きとした旅行記でありました。

大興安嶺は高度千メートル以上あるモンゴリアの高原が低平な満州平原へと不連続に移り変わる境目にそってモンゴリア高原をふちどっている幅広い山地の帯です。

探検隊が歩いたのは50度から北のアムール河とアルゲン河とが描く半円の中、ほとんど高原と化した北部大興安嶺。北海道ほどの広さのこの高原は頂のまるい晩壮年期の山々の無限の連なりです。東に流れてスングアリーに注ぐ河川と西に流れるアングル河の支流の分水嶺、隊は天測を頼りに地図上の白色地帯を歩きながら、水の流れの方向でそこが分水嶺であることを確認するわけです。



文中にこう書かれた個所がありました。（・・・高い山とは遠く隔ててこの分水嶺は単に西からと東からの侵蝕力のつり合っている線にすぎない）と。

これが抽象的な表現なのか？無謀にも「面と線」の抽象画になると確信してしまいました。それでもいざとなると具体的にどう描けばいいのか？形にするには実際に見えるものがあれば都合なのに一などと漠然と考えていました。

ある時たまたま伊予柑を縦半分に割ったところ果実の中の構造が特に「砂じょう」と呼ばれている部分の連なりの形状がほぼ対称的になっていて分水嶺を想わせました。

これを分水嶺とこじつけてみよう、深く考えずに丸写しのようにして公募展へ、変節漢返上と決意して個展も試みました。

今「分水嶺」として作品にしていますが抽象になっているか不安がつきまといます。

文中の描写から想像される大興安嶺の魅力にとらわれているわけですが、ここから放れて自由な構成など勉強なささいなど注告を受けます。自分としては「線としての分水嶺」に固執しながら、漠然としてですが力、動き、バランスなど好きなフォルムで表現出来たら・・・など想っています。



批評に納得する度についつい朝令暮改して「昔はものを想はざりけり…」だったなとか少し賢く進化したような気分になる。「抽象になってます」と云われると安堵する。

こんな事のある日常が有り難く生き甲斐のひとつになっています。良い点悪いところ、沢山の指摘アドバイスをお願いします。



カットの山2点 大興安嶺

老境の今 '16「汎美便り」

保倉 一郎

現代社会で暮らす実在性と、自己を見つめる視野、ともに感じ考える絆が今日のアートの魂であるべきです。

自分自身の精神を見つめるもう一人の私がい
て、更にそれを取り巻く暮らしの世界を見つめる
者がいて、私を見守っている。

いつの世も私達は「考える輩」でなければなり
ません。それが欠けてはアートの心も感覚や感情
が希薄になり、良い絆を保てなくなります。

それを汎美術協会の仲間期待しています。皆さんと一緒に考えたいのです。精神に支えられた感情が通い合う喜びが欲しいのです、どうか心を同じにしてください。そして私を支えてください。

汎美の精神は、深い理性と静かな情愛をもって生きる暮らしで、互いに支え合う必要があり、特に作者には強い精神性が必要になります。

若い会員とは時代の差を感じますが、根底に流れる心情は変わらず共有できると信じます。老いた私にも関心を寄せて下さることを願います。

80歳になる心境はこんなものです。

今も生命の力と躍動を思い浮かべながら描き続けます。

それを思い続けているわけでもないとおもいますが…今では先のことは思わず、いずれ



生命の終わるのは自然のことで不安を感じません。

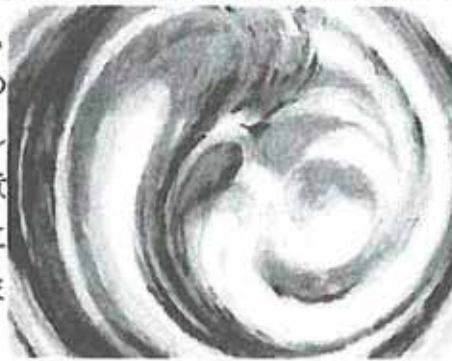
いく度も死線を越えて老いた身は、死の恐怖や不安を全く意識しなくなりました。

苦痛は薬で避けてゆけるはずです。

先を知らずに平常心でいられ、過去の想いのなかに生き
ている自分が不思議だとも感じますが、疑問も悔いも悩ま

なくなりました。老境の呆然としたような不明瞭な意志は、真に思いがけない実際です。でも描く絵は、温和で静かな心境でいながら嘗てない激しさと鮮明な色彩・強い感情に満ちた情緒のイメージになります。

自分の心理分析は不確かなものゴッホとムンクをごっちゃにし純だが強い情愛を探る矛盾した意そんな力や思いは、以前にも今に障害者になっても心は健康なまのか、不思議な心境です。



で解りません。たような気持ちと、清識が画面に展開します。も引き出せないのに？まの側面が残っている

2016年10月27日

美しい中年女性・茜を想う初老・浩生の深層心理に迫る、愛とは…。

木曾路の一夜

愚 聴風

「木曾路は全て山の中である…」と藤村が述べたのは、かれこれ八〇年も前のことになろうか。しかし今でも道筋を少し離れば、当時と変わらない山林に覆われた山である。秋風が静かに流れて竜胆が秋に色を添えている。

ふと思い立って浩生はつれづれなるままに木曾路へ旅立ったのである。

中山道屈指の難所とされた、標高一千メートルを越える鳥井峠への宿が奈良井宿である。従って奈良井宿は相当にきつい坂道にある。当時の俵を忍ばせて整備された佇まいで、浩生は街道はずれの旅籠に一夜の夢を結ぶことにした。古い建築を改装したのだろう、古民家特有の臭いが漂って、より一層旅の情趣が湧いた。

その夜は旅籠特製、夕食の濁どろく膠じょうに舌鼓を打ち草枕を友にした。深夜、窓に散りかかる枯葉の音に目覚めた彼は、もの狂おしいまでの寂しさに、暫く連絡のなかった茜あかねに手紙を認したためることにした。

茜は中年の、黒の似合う魅力的な女である。仙台にいる頃、若くして夫を病に失い、編集の仕事を生業なりわいに一人娘を育てあげ、嫁がせた後は独り身である。

浩生は枯葉が窓をたたく音を聴き、独りになってしまった茜の、深夜に聴く凧は如何ばかりだろうか想いを馳せていたら、次のような句が自然に浮かんできたのだった。

秋さなか眠りと覚ます木曾の落葉はよ

浩生の嫌う単なる写生句で、中学生の句みみたいな恥ずかしいしろものだが、そのまま、先刻奈良井宿でスケッチしたハガキに、彼女への便りの挨拶句として認したためた。とりあえ

ず明日はこのまま街道にあったレトロの赤いポストに入れることにした。その夜、茜を想うと彼女の熱い姿態が眼交を舞いまんじりとも出来なかった。

石落が花を持ち、花八つ手が時雨を呼ぶと立冬である。忘れた頃に茜より一通の書信が届いた。茜の近況と新しい家庭生活を謳歌している娘の事等を綴ったものであるが、その末尾に、苦勞して育てた娘が一人前の大人に成長した餞の句だろうか



石落

緋と燃えろ思いも夢も葉立つとき

と記されていたのである。浩生はこの“初五”句にある「燃えろ」は無いだろう、彼の描いている茜のイメージからはとても考えられない言葉だ。不適切で不自然と訝り、仮名書きに直してみた。

□ともえろ □おもいもゆめも □すだつとき

この句に隠された□印を読んで浩生は愕然としたのであった。

これは茜が込めた暗号なのだろうか、まさか彼女が沓冠を弄するとも思わなかったが、次いで彼は自分の贈った無意識のうちに出来てしまった句を同じように仮名書きにしてみた。すると

あきさなか ねむりをさます きそのはよ

何と言うことだろうか。日頃憎からず想っている茜への心情が意識下でそう書かせたのだろうか。彼女は浩生が無意識的に詠んだ句を、折句として捉え、そこに秘められた意味を覚ったに違いない。そして返句として娘宛ての餞の句を借りて返信の末尾を飾ったのだろう。浩生自身は沓冠など全く考えずに創った句に彼の深層に蠢く想いの発露があったのだった。それを読み取った茜は流石と言わざるを得ない。

フロイトなどの影響を受けて、深層の心理を対象とする芸術表現＝シュールリアリズムが台頭したのは前世紀初頭である。そしてシュールリアリズムは、もう一つの抽象主義と共に現代芸術を支える二大支柱とも考えられる。

シュールリアリズムの言う、浩生の意識されない深層心理・瞑い心の奥底花八つ手の世界、所謂「下意識界」が、偶然に俳句という形をもって表層に顕現されたものと思われるのである。あるいは神がそうさせたのかも知れない。

花八つ手が花を付ける季、外はと目をやれば 夙が秋の陽を受けた櫟の葉を舞わせ、忍冬に纏わり付いた烏瓜が朱く揺らいでいた。豪華な風景だったが浩生は夙に一筋の哀しみの声が糸を曳いているのを聴き逃しはしなかった。



奈良井宿、この先は鳥井峠である

がらし

風や悲哀の糸と曳くとうな

愚 聴風

註 杳冠=くつかむり・くつかぶり
詩歌5字7字各句の頭(冠)と、
各句の一番下の音(杳)とにメ
ッセージを隠したもの。



愚 聴風=大辻 敏成
(2016年10月30日初稿)



スノードロップ (待雪草)

編集後記

“春は名のための風の寒さよ…” 風こそ冷たいが、野に光は溢れ、草はその色を濃やかにしました。春の女神・佐保姫が汎美展を従えてやって来ました。私達も大いに萌えましょう。汎美便り38号へのご投稿深謝します。

さて会員の皆様、出品者を増やすべく、積極的に推薦をお願い致します。

汎美便り38号

2017年3月発行 汎美術協会事務局

大田区山王 44-11-701

中西祥司方